

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3798 号 2017.7.27 発行

「まだまだ続く人生だったのに…」

相模原殺傷事件1年 朝日新聞 2017年7月26日



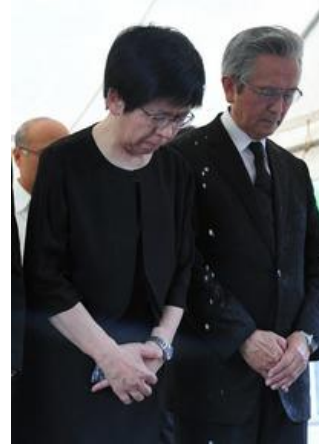
「津久井やまゆり園」に通所していたという親子も献花台に花を手向けた=26日午前9時31分、相模原市緑区、角野貴之撮影



相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害され、27人が重軽傷を負った事件から26日で1年。園の前には献花台が設けられ、手向けられた花束でいっぱいになった。訪れた人たちは雨が降りしきる中、深い祈りを捧げた。



かつて10年ほど園で働いたという60代女性は「私たちの方が入所者に思いやり、優しさを教えて



もらいました。悲しいし、悔しい」。園に約11年勤めた清水正法（まさのり）さん（69）も「障害者がもっと安心して暮らせる社会を作っていくといけない」と話した。

知的障害がある知人がいる川添望さん（52）は、「ひとごとと思えない。事件を絶対に忘れてはいけないし、繰り返してはいけない」と語った。

殺人罪などで起訴された元職員の植松聖（さとし）被告（27）は「障害者なんていなくなればいい」と供述。朝日新聞記者に6月に寄せた手紙でも、その考えに変化はない。重複障害のある次男（28）と訪れたケアマネジャー垂水京子さん（60）は「1年経っても考えが変わっていないのが腹立たしい」と話した。



園の入倉かおる園長（60）も黙禱（もくとう）し、大きなユリの花束を捧げた。「あっ

という間に命を奪われ、守ってあげることができなかった。申し訳ない気持ちでいっぱい」と悔やんだ。「まだまだ続く人生だったのに無念だ」とつぶやいた。植松被告について、「やってしまったことの重大さを直視できない弱さがあるのだろう」と話した。

植松被告の初公判は来年以降になるとみられている。(飯塚直人、白石陽一)

相模原殺傷1年 弱者に優しい社会に…冥福祈り献花

毎日新聞 2017年7月26日



津久井やまゆり園の前に設置された献花台で手を合わせる人たち＝相模原市緑区で2017年7月26日午前8時6分、宮武祐希撮影

相模原市の障害者施設で入所者19人が殺害され、27人が重軽傷を負った事件は26日、発生から1年を迎えた。雨の中、現場となった「津久井やまゆり園」前の献花台には、朝から多くの人たちが次々と花を手向けに訪れ、静かに冥福を祈った。【森健太郎、国本愛】

やまゆり園の入倉かおる園長(60)らは午前9時ごろ、献花台の前で黙とうし、花束をささげた。「あの日はきれいな夏空だった。きょうはあの日と違う空なのが少し救われる気がする」と空を見上げ、「数字では言い表せない一人一人との思い出があった。なすすべもなく、守ってあげられなかったのが本当に申し訳ない」と19人をしのんで声を震わせた。

この日は、入所者たちが移った横浜市の仮園舎でも犠牲者を悼む時間を設けるといい、入倉園長は「職員も入所者も思い出に浸りながら、静かに時間を共有したい」と語った。

入所者家族会の大月和真会長(67)も訪れ、あいにくの雨に「魂が安らかになっていないのかと思ってしまって……」と声を詰まらせた。「1年間大変だったけれど、家族にとっては何も始まっていないし、何も決まっていない」と話した。

神奈川県重症心身障害児(者)を守る会の伊藤光子会長(75)は「24日の追悼式で19人の人となりを知った時、涙が出た。絶対にこの人たちの死を風化させてはいけないと改めて思った」と唇を引き締めた。毎月26日に手を合わせ、12回目の献花だといい、「これで終わりではなく、19人の無念さを胸に秘めながら、弱者が安心して暮らせる社会をつくっていかなくてはならない」と述べた。

相模原市の垂水京子さん(60)は、事件の約2週間前まで毎月短期滞在で園を利用して次男(28)と訪れた。偏見や差別がある現状を憂え「(障害者は)経済的には役に立たないかもしれないが、いいじゃないかと支え合う世の中になれば。この子と一緒に生きていく」と決意を新たにされた。

相模原障害者施設殺傷事件

2016年7月26日未明、相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者が次々と刃物で刺され、入所者19人が死亡、職員3人を含む27人が重軽傷を負った。19人の殺人罪などで起訴された植松聖被告(27)は「障害者は生きていても意味がない」などの言動を重ね、検察側による起訴前の鑑定では、自己愛性などの複合的なパーソナリティ障害と診断された。

19人犠牲の相模原障害者殺傷事件から1年 忘れない 繰り返さない

東京新聞 2017年7月26日

相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者十九人が殺害され、二十七人

が重軽傷を負った事件は二十六日、発生から一年を迎えた。時折、激しい雨が降る中、早朝から多くの人たちが献花に訪れ、犠牲者を悼むとともに事件の教訓を忘れないことを誓った。（加藤益丈、井上靖史、原昌志）



相模原殺傷事件から1年を迎え「津久井やまゆり園」の献花台の前で手を合わせる人＝26日午前、相模原市緑区で（潟沼義樹撮影）

入倉かおる園長（60）は午前九時、園を運営する法人の役員らと献花した後、報道陣の取材に「十九人の犠牲者の顔、ご家族の顔を浮かべながら献花しました」と答えた。犠牲者への思いを問われると「守ってあげられなくて本当に申し訳ない。まだまだ続く人生があった」と謝罪の言葉を繰り返した。

同様に足を運んだやまゆり園家族会の大月和真（かずま）会長（67）は、元職員の植松聖（さとし）被告（27）が今も障害者差別の考えを示していることについて「まだ自分の中に閉じこもっている。早く罪の深さに気づいてほしい。間違ったことをしたと反省してくれると、やっと私たちも浮かばれると思う。謝罪してほしい」と話した。

一般の人も多く訪れた。発生直後、「入所者を一番守るべき職員がなぜ殺すのか」と大きな衝撃を受けたという相模原市中央区の女性団体メンバー、川添望さん（52）は「忘れない、繰り返さない、という気持ちを伝えに来た」と語った。

川添さんは、知人のやまゆり園元職員に話を聞くなどし、自分なりに事件の背景を考えてきた。「答えはまだ出ていない。しかし、障害がある人と共に生きることはできるはず。これからも考え続けたい」と前を向いた。

植松被告の初公判めど立たず 再鑑定か 差別思想変わらず

東京新聞 2017年7月26日

横浜地検は、元職員植松聖被告の鑑定留置の結果、刑事責任能力に問題はないとして二月、殺人や殺人未遂など六つの罪で起訴。裁判員裁判での審理が予定されているが、横浜地裁での公判前整理手続きは始まっていない。弁護側が再鑑定を求める可能性もあり、初公判の見通しは立っていない。

関係者によると、家族の一部は、被害者の氏名公表は望んでおらず、横浜地裁は法廷で氏名を読み上げずに匿名で審理を進める決定をした。

横浜拘置支所に勾留中の植松被告は今年六～七月、本紙記者に「意思疎通がとれない人間を安楽死させるべきだ」などと書いた手紙を送った。誤った障害者への差別思想が今も変わっていないことが浮き彫りとなり、被害者家族らから強い非難が寄せられている。

事件があった津久井やまゆり園は二〇一八年度中に取り壊される見通しで、入所者らは既に別の施設に転居。神奈川県は入所者家族らの要望を受け、同規模施設に建て替える方針をいったん決めたが、障害者団体などから反対の声が浮上。審議会での議論が続いており、県は九月にも結論を出す見通し。

植松被告は事件前、障害者を差別視して殺害を予告する手紙を出すなどして、精神保健福祉法に基づく措置入院とされたが、事件は防げなかった。措置入院解除後の支援策について厚生労働省などの検討チームで議論され、厚労省が提出した同法改正案が国会で継続審議となっている。

菅長官「障害者に寄り添う」

時事通信 2017年7月26日

菅義偉官房長官は26日の記者会見で、相模原市の障害者施設での殺傷事件から1年を迎えたことを受け、「二度とあってはならない。引き続き障害者、家族の思いに寄り添いな

がら、丁寧に施策を進めていきたい」と語った。措置入院患者の支援体制見直しに関する精神保健福祉法改正案についても「早期に成立させたい」と述べた。

塩崎大臣会見概要より (H29.7.25 (火) 10:52 ~ 11:08 省内会見室)

(記者) やまゆり園の殺傷事件から明日でちょうど1年になります。昨日、県の主催の追悼式がありまして大臣もご出席されましたけれども、あらためて大臣の思いをお聞かせ下さい。

(大臣) 明日、7月26日は相模原市内での事件のちょうど1年となります。昨日、神奈川県などが主催いたします津久井やまゆり園で起きた事件の追悼式に私も出席をさせていただきました。お亡くなりになられた方に改めて哀悼の意を表させていただきます。こういうことは二度と起きないようにしないと強くと強く決意を新たにしたところでございます。厚生労働省としては、共生社会の推進あるいは社会福祉施設の安全確保、さらには職場環境の改善などの再発防止の手立てに取り組んでいるところでございます。精神保健福祉法の改正案については、措置入院者が退院後に医療や福祉などの支援を確実に受けられるようにするという観点から、国会に提出をいたしました。継続審議になっておりますが、早期の成立を図りたいと思っております。併せて、29年度から保健所などに全国200人程度の精神保健福祉士(PSW)を配置することを新たに行うために、地方交付税措置を既に講じています。自治体に対しましては、改めて退院後の支援の重要性を訴え、体制整備についても努力いただくように、私どもとして用意している地方交付税措置を積極的に活用してもらうように呼びかけていきたいと思っております。

「ともに生きる社会」の実現に向けて

大阪府 平成29年7月26日

神奈川県相模原市の「津久井やまゆり園」で、何の罪もない障がいのある多くの方々が、大切な命を奪われ、傷つけられる事件から、今日で1年が経ちました。

改めて、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご家族には、心からお悔やみ申し上げます。また、傷つかれた方々には、心からお見舞い申し上げます。

事件に触れることで、障がいのある、なしに関わらず、全ての人の命の大切さ、お互いを気遣うことの大切さを、改めて思い起されたのではないのでしょうか。

この事件に限らず、障がいのある方が被害に遭われる事件、事故が後を絶ちません。

先日も、知的に障がいのある方が、炎天下の中、車内に6時間以上取り残され、命を落とされるという、許しがたい事件がありました。

また、車いすを利用されている方が、自力でタラップを上られるという報道もありました。すでに改善策が講じられておりますが、障がいのある方に寄り沿った適切な対応を取っていただくことが何よりも大切であると考えています。

このほか、東京や大阪、埼玉では、視覚に障がいのある方が駅ホームから転落し、お亡くなりになるという事故がありました。「事件」や「事故」の報道に接するたびに、防げなかった事件だったのか、近くの人々の声掛けがあれば事故は防げたのではないかと考えますと残念でなりません。

昨年4月、「障害者差別解消法」が施行されました。これらの事件、事故は、こうした中で起きています。法令が整備されても、人々の意識が追い付いているのだろうか、障がいや障がいのある方々に対する正しい理解がまだまだ不十分ではないか、障がいのある方々に直接関わる人も含めて、啓発の重要性をひしひしと感じています。

このため、啓発の一環として、本年6月から「ヘルプマーク」の配布を開始しました。障がいのある方をはじめ、援助や配慮を必要とする人やそのご家族、支援をしていただく人の安心につなげるとともに、府民の助け合いの気運を高め、「共生社会」の実現に向け、

オール大阪で取り組んでいくものです。

障がいのある方への配慮や、人々がお互いに相手を気遣い、支え合うことのできるまちは、全ての人にとって暮らしやすいまち、優しいまち、すなわち、「共生社会」の実現に繋がるものと思います。

皆さん、今一度考えてみてください。そして、すこし優しくなってみませんか。皆さんの「すこし」が大きな力になると信じています。

障がいのある皆さん、改めて申し上げますが、虐待や差別を受けるなど、嫌な思いをしたり、困ったりしたときは、一人で悩まず、ご家族や友人、支援者に相談してください。市町村や大阪府にも相談窓口がありますので、どんな小さなことでも構いません。連絡してください。相談してください。きっとお力になれると思います。

「共生社会」の実現に向け、大阪府はこれからも全力投球します。皆さんお一人おひとりのご理解とご協力をよろしくお願いします。

平成 29 年 7 月 26 日

大阪府福祉部障がい福祉室長 西口禎二

神奈川県相模原市の障がい者支援施設における殺傷事件から 1 年

大阪市 2017 年 7 月 26 日

神奈川県相模原市の「津久井やまゆり園」で、多くの障がいのある人の尊い命が奪われ、また、傷つけられるという痛ましい事件から、今日で 1 年が経ちました。

改めて、お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご家族の方々には、心からお悔やみを申しあげます。また、傷つかれた方々には、心からお見舞い申しあげます。

事件から 1 年が経ちますが、決してこの事件を風化させないためにも、改めて、私達一人ひとりが、すべての人たちの命の大切さや尊さをについて考えなければなりません。また、このような痛ましい事件を二度と起こさないためにも、障がいのある方とない方がお互い支え合い、共に自分らしく安心して暮らしていける社会を実現しなければなりません。

しかしながら、障がいのある方が暮らしやすい社会とは言い難い事件や事故が起きています。視覚障がいのある方が駅のホームから転落し、お亡くなりになる事故や、車いすを利用されている方が飛行機の搭乗時に自力でタラップを上げらせるという報道がありました。また先日も、知的障がいのある方が車内に 6 時間以上も取り残され、お亡くなりになる痛ましい事件がありました。

昨年 4 月に障害者差別解消法が施行され、社会全体で障がいある方への差別の解消に取り組むことが明記されましたが、このような事件や事故が起こるたびに、まだまだ障がいや障がいのある方に対する正しい理解や障がいのある方への配慮が十分であるとは言えず、啓発活動をより一層進めていかなければならないと痛感します。

今年 6 月から大阪府内で、障がいのある方をはじめ援助や配慮を必要とする方やその家族の方への思いやりのある行動を広める取組みとして、「ヘルプマーク」を配布しています。この取組みを契機に、思いやり、支え合いの輪が広がることを願っています。困っている方に声をかけることは勇気のいることですが、皆さん一人ひとりの勇気と優しさが、誰もが暮らしやすい社会にきっと繋がるものと思っています。

大阪市では、障がいのあるなしに関わらず、すべての人が共に安心して暮らしていける社会の実現をめざして取り組んでいます。皆さんのご理解とご協力をお願いします。

障がいのある皆さんは、虐待や差別を受けて、嫌な思いをしたり、困ったことがあったときは、一人で悩まず、周りのご家族や友達、支援を受けている人に相談してください。

大阪市内にも、皆さんの力になるための相談窓口を設けています。ぜひ、相談してください。

平成 29 年 7 月 26 日

大阪市福祉局障がい者施策部長 中島進

本当の意味の「障がい者」を見せたい だから、僕は走る 宮嶋加菜子

朝日新聞 2017年7月26日



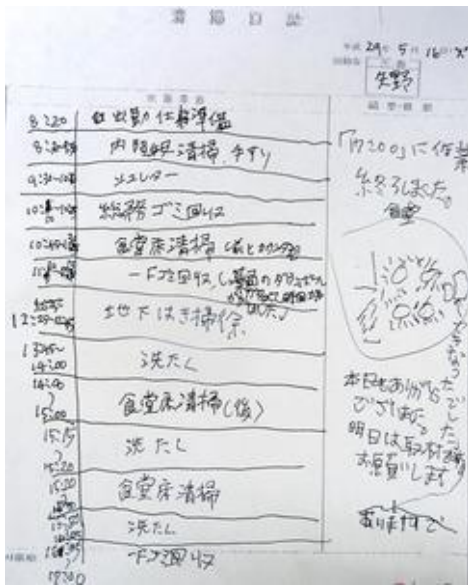
仕事帰りに多摩川の土手を走る
矢野慎太郎さん=東京都世田谷区、池永牧子撮影

「障害者」とは、「自分自身」とは何なのか——。そんな問いと向き合い、走り続ける男性がいる。矢野慎太郎さん（48）。きっかけは、1年前に相模原市で障害者19人が殺害された事件だった。「自分がかわいそうな存在なのか」。その答えを見つけないと思っている。

矢野さんの手足は、脳性まひの影響で硬直している。動きはゆっくりで、話す言葉もはっきりしない。

21歳の時、友人と

ともに障害者がリングに立つプロレス団体「ドッグレッグス」を立ち上げた。仕事をしながら「サンボ



慎太郎」の名で約25年もリングに立ち、障害者や健常者のレスラーと熱戦を繰り広げてきたのは、「互いを知るきっかけがあれば、障害者と健常者はもっと近づける」という思いからだ。

現在は東京都内の自宅で両親と暮らし、週に5日、都内の病院でパートの清掃員として働く。

朝5時半に起き、約1時間かけて電車で通勤。午前9時から午後5時まで、病院の食堂や階段の掃除、ゴミの分別を担当する。月給は12万円ほど。休日はボクシングジムで体を鍛える。

病院で働き始めた当初、動作がぎこちない矢野さんと患者との間で接触事故があつては危険という配慮から、屋外での作業が多かった。「本人の努力もあり、今は院内の掃除も任せられるようになった」と職場の上司は言う。医師や看護師に大きな声で話しかけ、職場の仲間との飲み会にも積極的に出席する。

そんな日常の中、あの事件が起きた。昨年7月26日。障害者施設「津久井やまゆり園」で入所者19人が殺害され、元職員の男が逮捕された。

「障害者がかわいそう」「生きていても無駄だ」。その日の勤務後、男がそう供述しているとニュースで知り、ショックを受けた。ほぼ毎日思いをつづっているフェイスブック（FB）にこう書き込んだ。

《今日の仕事は終了しました。けれども今朝の相模原のニュースは悲しいです。弱い人間（ひと）な矢野慎太郎及びサンボ慎太郎けれども これからどこまで出来るか自分自身も判（わか）んないけれども これからも自分らしく生きて そして本当の意味の「障が

イ者」も見せたいです》

警視庁、DV 被害者転居費負担へ 上限 7 万円、8 月から運用開始

共同通信 2017 年 7 月 26 日

警視庁人身安全関連事案総合対策本部は 26 日、ストーカーやドメスティックバイオレンス（DV）の被害者らが避難するための転居費用を公費で負担する制度を 8 月から始めると発表した。被害者らの負担を軽減して、安全確保を促すことが狙い。

同本部によると、対象はストーカーや DV、児童・高齢者虐待などの相談者や被害者と、その親族。危害を加えられる恐れがあつて自宅に住み続けることが困難で、新たな居住先の確保の見通しがあることや、経済的に困窮していることなどが条件。

経済的な理由で転居が難しい場合には、警視庁の捜査員が引っ越し作業をしていた。公費負担は上限 7 万円目安。

【夕焼けエッセー】専属洗髪師

産経新聞 2017 年 7 月 26 日

月に一度の散髪に行ってきた。家の周りには、数え切れないほどの理髪店があるにもかかわらず、淀川を越えて隣町まで自転車で 30 分もかけて行く。

それには、理由がある。

25 年ほど前になるが、支援学校に勤めていた頃、進路指導主事という仕事を仰（おお）せつかった。当時は障害者の就労に対する社会の理解が進んでいなかったもので、生徒の就労先を探すのは並大抵のことではなかった。

新聞の折り込み広告を見ながら、生徒が働けそうな仕事を探し、一件一件電話をする。たいていは「支援学校ってなんですか」から始まる。学校の様子や生徒の特徴などを説明し、人事担当者に会ってもらえるまでどれほど電話をしたらどうか。その中から実習に移れるケースはまた、その何分の一かであった。実習日が迫り、行き先が確保できない生徒がいるときには、藁（わら）にもすがる思いだった。

そんなとき、中学校の同級生が理髪店をやっていることを思い出し、一人の女生徒の実習を頼み込んだ。「まあ、ハサミを持たせることは無理でも、接客や下働き、うまくいけば、洗髪くらいはできるようになるかも」と、実習を引き受けてくれた。当時はお店が繁盛していたこともあって、運良く卒業後採用してもらえることになった。

それから 25 年。いろんなことがあった。従業員同士のトラブルや接客態度の悪さ、遅刻の常習と、数え上げたらキリがない。何度クレームを聞いただろう。しかし、従業員は今やその子 1 人になり、同級生と 2 人で店を切り盛りしている。

そんなわけで、私は他所の理髪店に浮気をするわけにはいかないのである。今回も私の専属洗髪師にシャンプーをしてもらった。相変わらず無愛想である。

権藤 実 （61） 美術家 大阪市都島区

社会福祉施設でパラインフルエンザ集団感染

日テレニュース 2017 年 7 月 26 日

石川県金沢市の社会福祉施設で、入所者ら 70 人がパラインフルエンザに集団感染したことが分かった。

パラインフルエンザの集団感染が確認されたのは、金沢市の社会福祉施設「三谷の里ときわ苑」。市の保健所によると、今月上旬から入所者が発熱やのどの痛みを次々と訴え、このうち 5 人からウイルスが検出されたという。これまでに 40 代から 80 代の入所者 67 人と職員 3 人の計 70 人が発症し、このうち入所者 10 人が肺炎などで入院している。

保健所によるとパラインフルエンザは夏風邪の原因ウイルスとされ、1、2 週間で治るケースがほとんどだが、肺炎や気管支炎などを引き起こす場合もある。金沢市では施設に

対し、衛生管理の徹底を指導するとともに、市内の他の社会福祉施設にも注意を呼びかけている。

ダウン症の書道家・金澤翔子さん 繊細かつ大胆な筆さばき 恵那文化センターで30日まで /岐阜 毎日新聞 2017年7月26日

ダウン症の書道家、金澤翔子さん（32）＝雅号・小蘭＝の書展「共に生きる」が25日、恵那市長島町中野の恵那文化センターで始まり、書道ファンらが繊細かつ大胆な筆さばきに見入った。初日には翔子さんの揮毫（きごう）パフォーマンス、母泰子さん（雅号・蘭風）の講演会も開かれた。

翔子さんは5歳の時から書道に取り組み、泰子さんに師事した。

京阪、大阪・天満橋～枚方に定期観光船 9月から運航

日本経済新聞 2017年7月26日

京阪ホールディングスは25日、大阪市の天満橋と大阪府枚方市を結ぶ定期観光船を9月から運航すると発表した。淀川の定期船は戦後初という。テラス付きの船内では料理やガイドの歴史解説が楽しめ、第2日曜日を中心に運航する。淀川では戦前に大阪市と京都・伏見との間に水運が発達していた。同社は大阪―京都間の航路開設も視野に入れている。

子会社の大阪水上バス（大阪市）が、天満橋の八軒家浜船着場と枚方の淀川河川公園内の枚方船着場を結ぶ。片道3時間で料金は食事付き4950円。定員約60人で普段は大川などで運航するクルーズ船を使う。枚方市内のイベントにあわせて運航する。京阪HDは枚方市と組んで淀川を生かした観光に力を入れており、これまでも不定期で観光船を運航していた。

職場での障害者虐待972人 上司から暴言も 厚労省28年度調査

産経新聞 2017年7月26日

職場で雇い主や上司から虐待を受けた障害者が平成28年度に972人に上ったことが26日、厚生労働省の調査で分かった。虐待があった事業所は581カ所で、同省労働紛争処理業務室は「規模の小さい事業所では障害者の雇用経験が乏しく、理解が進んでいない。雇用管理に周知啓発を行っていく」としている。

集計結果は障害者虐待防止法に基づいて公表されており、今年で5回目（1回目は24年10月～25年3月の半年間）。虐待を受けた障害者数は前年度（1123人）と比べて、13・4%減った。内訳は知的障害が530人で最も多かった。

虐待の種別（一部重複）では、賃金未払いや最低賃金を下回る金額しか支払わないといった経済的虐待が852人で最多。暴言や差別的発言などの心理的虐待が115人、身体的虐待が57人、性的虐待が6人だった。

虐待例では、飲食サービス業に勤めていた九州地方の知的障害の20代男性が、上司から物を投げつけられ、「死ぬ」といった暴言を受けたとして通報があった。聴覚障害者が上司から「会社を辞めろ」という紙を眼前に出された例や、知的障害者が性的関係を強いられたケースもあった。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行